

日本社会心理学会会報

217号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:宮本聡介)

2018年11月21日

日本社会心理学会第59回大会・開催報告

日本社会心理学会第59回大会が2018年8月28日と29日に開催されました。

概要報告

期日: 2018年8月28日～29日

会場: 追手門学院大学

大会準備委員長: 浦 光博

1. 参加者数 606名(予約参加418名、うち招待28名、当日参加188名)
2. 発表件数 常任理事企画シンポジウム1件、自主企画ワークショップ6件、口頭発表ロングスピーチセッション9件、口頭発表ショートスピーチセッション83件、ポスター発表235件
3. 発表取消

口頭発表 S27-02 真鍋一史

ポスター発表 P22-05 新井範子 P22-19 高比良桃子・小宮あすか P23-29 高山 智・福住幸代



大会参加記

日本社会心理学会第59回大会の参加記を書かせていただくにあたり、初めに大会準備委員会の皆様に御礼を申し上げます。地震の影響があり大変な状況のなかでの準備は、多くのご苦勞があったかと思えます。そのようななかでの大会運営にも関わらず、当日のスタッフの皆様の対応や動きは素晴らしかったと感じました。会場内で場所が分からず迷っていると、スタッフの方がすぐに声をかけて、案内をしてくださりましたし、休憩室では丁寧な対応をしていただきました。また、準備委員会の先生方が、率先して仕事をされている姿を多く目にしました。浦実行委員長をはじめ、大会準備委員会の皆様に深く感謝いたします。

さて、私は十数年前から社会心理学会の会員であるものの、近年は主に発達心理学や保育学に関連する学会に参加していたため、社会心理学会大会に参加するのは数年ぶりとなります。1日目のみの参加で、シンポジウム及びポスター発表を拝見させていただきました。そのなかで、常任理事会企画シンポジウム「社会心理学を語ろう」では、3人の先生のお話を大変興味深く聞かせていただきました。3人の先生のお話に共通して、社会心理学という学問領域の存在意義を問う声が多く出てきているのだと感じました。発達心理学会や他の学会では、心理学とはなにかとか、心理学のパラダイムを問う「そもそも論」が、すでに私が学会に参加し始めた20年ほど前からワークショップやラウンドテーブルなどで議論されていたと思います。一方、社会心理学会では、「そもそも論」を聞く機会はあまりなかったように思います。大坪先生がおっしゃっていたように「社会心理学は絶滅の可能性はある」ということが、社会心理学会で共有されてきているのだらうと感じました。確かに、私自身も、脳科学や生理的指標の発展に加えて、最近のビッグデータを用いた研究の隆盛から、これまで社会心理学が用いてきた方法論では限界が来てしまうのではないかと感じることもありましたが、将来的に心理学という学問領域はなくなってしまうのではないかと悲観的な展望を持つこともあります。しかしながら、3人の先生に共通して、社会心理学の強みを活かしていくことで、多くの可能性があるということを語られていました。大坪先生は、社会心理学がこれまでやってきたことの「足場を固めて」、「社会心理学の発想、手法で他の領域にアプローチすること」の可能性を、相馬先生は、「社会心理学は、社会的文脈における『修正可能な部分』に焦点化できるという強み」を活かして、社会の様々なところにアプローチしていく可能性を示されていました。また、三浦先生は「社会心理学の芯になるもの」を固めていくことの重要性を示されていました。これらのお話は、社会心理学の可能性を感じることができるとともに、他の領域で研究活動をしている私にはとても参考になると同時に励みになりました。

私は、最近では保育系のフィールドで研究活動していますが、保育系の学会では、これまで科学的、実証的な研究が十分になされてきませんでした。近年は、エビデンスベースの教育・保育が求められるようになり、様々な研究が進んでいますが、やはり心理学からのアプローチが非常に有効なものとなっています。保育というと、発達心理学や教育心理学の範疇であると考えられがちですが、社会心理学の発想や方法論からアプローチできるものがいくつもあります。たとえば、近年問題となっている、保育現場の人間関係、労働環境、離職、男性保育士への偏見といった問題は、

若尾 良徳



社会心理学からのアプローチが有効であろうと思います。あるいは、社会心理学の発想から新たな問題を浮き彫りにすることができるかもしれません。社会心理学の強みを活かして、様々なフィールドで問題解決に資する研究者が現れることで、社会心理学が発展していける可能性があるのではないかと感じました。

(わかお よしのり・日本体育大学)

第59回日本社会心理学会大会 参加記

宮島 健



今年の社心大会は、3月に博士課程を修了した私にとって、就職後初の学会参加・発表となりました。院生の頃と比較すると、業務のためにどうしても研究と距離ができてしまいがちでしたが、本大会は改めて社会心理学の面白さを認識する機会を与えてくれたと感じています。

大学院在学時と比較して、今大会では私の学会参加の仕方に変化がありました。それは、自身の研究テーマに直接的に関連しないトピックにも、研究の拡がり求めてより積極的に参加するようになったことです。私は大学院時代から一貫して多元的無知の研究を行ってきたため、集団や集団過程のセッションによくお邪魔していました。これからも、(主に)多元的無知のメカニズム解明へ向けた研究に取り組んでいく所存ですが、「男性による育児休業の取得率の低迷」など、職場組織に関連する問題を題材として扱ってきたために、問題解決に効果的な制度設計や介入策の導出など、得られた成果の社会への還元・実装に対する意識がより強くなりました。したがって今大会では、産業・組織心理的な文脈との接合を求め、組織・産業のセッション全てに参加させていただきました。ミクロからマクロまで、社会心理学に関連する多様な研究テーマをもつ研究者から構成され、発表件数が比較的多い本学会は「最先端の知識をシャワーのように浴びられる」魅力的な学会のひとつだといえるでしょう。

総会後のシンポジウム「社会心理学を語ろう」では、3名の先生方が話題提供してくださいました。大坪先生の「(他分野との)共同研究は嗜好ではなくマストだ」というお言葉と、常に複数のツール(実験・調査、生理指標、シミュレーション、fMRI など)を使った研究が不可欠のご指摘には、(普段、質問紙調査が主たる研究法の私としては)ぎくりとさせられました。続く相馬先生は、DV被害と関連させつつ社会心理学の知見の社会実装についてお話いただきました。得られた成果を世に還元していくという姿勢は私も強く賛同するもので、「社会的実装をするうえで理論的説明を与えられる社会心理学は多くの人に必要とされる領域である」というお言葉が強く印象に残っています。最後に三浦先生は、諸科学を学際的に繋ぐ力を発揮するため、multi-method/disciplinaryの実践、データ収集行為への敏感さ、そして社会心理学の「芯(i.e. 社会心理学全体に適用できる発見や一般理論)」を生み出すことについてお話いただきました。3名の先生方のお話には、共通して「他分野との連携の必要性」が含まれていたと感じましたが、三浦先生のご発表から、様々な分野を繋ぐ接着剤としての役割だけではなく、これぞ社会心理学!と他分野に存在感をアピールできる、社会心理学者でなければできないことを確立しましょう、というメッセージを感じ取りました。この点は今後の自身の研究の方向性を考えるうえでも意識せねばならない点だと、身の引き締まる思いでした。

社会心理学が学术界に貢献してきた点として、人々の判断や行動に及ぼす「状況の影響」を実証的に解明し、体系的に積み上げてきたことが挙げられると理解しています。この影響を踏まえると、再現性問題に関わる「問題のある研究実践(QRPs: Questionable Research Practices)」は、研究者個人の倫理観の低さよりもむしろ業績主義の圧力に屈したという側面もあるかもしれません。こうした事態に対し、日本社会心理学会は学会として何ができるのか、考えなければならない段階にきていると感じました。シンポジウムでの三浦先生のお言葉をお借りすれば、本学会が「Open Science Collaborationの胴元」となって、積極的に危機的状況に立ち向かっていくことは、時代の要請なのかもしれません。過去には、第57回大会の大会前夜祭企画として「社会心理学の明日はどっちだ!」が開催され、若手研究者間で議論する良い契機となりました。今後、例えば、事前登録制度の導入やnegative resultの積極的な受け入れなど、学会誌の在り方について柔軟な議論や検討がなされること、そして、これからも社会心理学の発見が世のため人のために活用されていくことを願っています。

最後になりますが、大会準備委員会の先生方と大会運営にご尽力された皆様に心より御礼申し上げます。

(みやじま たける・西南学院大学)

日本社会心理学会夏のチュートリアル 参加記

井上 裕香子

今年度、私は日本社会心理学会第59回大会の翌日から行われた、ベイズ統計を学ぶ夏のチュートリアルに参加した。これまで、何度かセミナーなどでベイズを勉強したことはあったが、実際にベイズでのデータ解析をしたことはなくそのイメージも掴めていなかった。今回のチュートリアルは、内容が実践的であり、受講によってベイズモデリングによる自分のデータの分析・報告ができるようになるのではないかと考えたことと、講師が今年度の社会心理学会の春の方法論セミナー「R/RStudio 入門」でもお世話になった小杉考司先生であったことから迷わず参加を決めた。

本チュートリアルは、理論の学習にもデータ解析実習にも時間をかけられるよう、2日間にわたって行われた。そのため、ベイズに初めて触れる人にも、ある程度知識はあるがRでのベイズモデリングには慣れていない人にも役に立つものだったと思う。

初日の午前中は、「理論編」の講義でベイズの基礎的な考え方を学んだ。例を交えた説明が豊富だったので、数式が多い講義だとしばしば挫



折してしまう私でも理解することができた。さらに、従来の統計検定とベイズ統計を比較した説明が多く、従来の統計検定でも扱えるデータをベイズで解析するメリットが分かりやすく示された。その後はいよいよ、「実践編」としてRを使った実習が始まった。はじめに従来の検定の代替としてのベジアンモデリングを行った。「これまでt検定や分散分析、回帰分析などで分析したような馴染み深いデータを、ベイズだとう解析・報告するのか」という課題は、心理学者向けの講座ならではのものであり、すぐに自分のデータ解析に役立てられるものであった。実習にはつきものの「上手くプログラムが動かない！」というトラブルがあっても、すぐに先生方に尋ねることができ、途中でつまづいて置いていかれることもなかった。その後は、やや応用的な線形モデルの例を扱った。従来の統計ではまた別の方法(GLMMなど)を用いて解析することになるが、ベイズでは先ほどの実習の延長線上にあり、多少モデリングを工夫するだけで解析が可能になるため、スムーズに新たなモデリングにも移行することができた。そして最後には、これまでの統計検定での分析が難しいデータを、ベジアンモデリングで解析する例がいくつか紹介され、ベイズ解析の可能性の大きさを感じた。

統計検定の限界が指摘されている昨今、その波に乗ってベジアンモデリングがどのくらい一般的な統計解析となるのか、またその変化にどれくらいの時間がかかるのかはまだ分からない。ただ、ベイズは二重の意味で、統計検定の限界を超えるツールになり得るのではないかと個人的には感じた。一つは統計検定の難点(例数設計をきちんとする必要がある、n数が多いと効果量が小さくても有意になるなど)を克服するという意味で、そしてもう一つは、これまでそもそも統計検定にのせるのが難しかった仮説が、モデルの立て方しだいで検証可能になるという意味で。特に、後者について「ベイズの限界は研究者の想像力の限界」と小杉先生はおっしゃっていた。これまでの心理学実験は、既存の統計解析法ありきで、それに乗るようなデータをとるという考え方で行われていた。しかし、ベジアンモデリングなら、研究者が適切なモデルを考え出すことができるならば、どんなデータでも解析できるように思えた。私自身は、今回のチュートリアルを通して、既存の検定をベイズで代替することまではできるようになったが、そういった新たなパラダイムでの解析のイメージはまだ掴めてはいない。それでも、そういう分析の可能性があると、実際の例を講義の最後に目にしたこと自体が大きい。まだまだ勉強することはあるが、このセミナーでベジアンモデリングの道を進むにあたって、大きな一歩を踏み出すことができたと思う。このような素晴らしい企画を開催してくださった、講師の小杉先生をはじめとした運営の先生方に心から感謝して、参加記を締めくくらせていただく。

(いのうえ ゆかこ・東京大学大学院総合文化研究科進化認知科学研究センター特任研究員)

名誉会員推戴

本年度、2名の会員が名誉会員に推戴されました。今川民雄先生、深田博巳先生です。心よりお祝い申し上げます。

名誉会員の推戴を受けて

今川民雄 先生



このたび名誉会員への推戴をいただきました。厚くお礼を申し上げます。思い起こしてみますと、私が日本社会心理学会に入会したのは1980年のことでした。この年初めて大会に参加したのですが、この第21回大会の主催校は関西学院大学でしたので、神戸まで出かけたことを思い出します。田中国夫先生が大会長でした。その後、学会の仕事として理事を6年勤め、その間に副編集委員長を経験しました。安藤清先生が編集委員長の時でした。また監事を4年間勤めました。毎年の監査がおもな仕事でしたが、無事務められたことは、多くの方のご協力が得られた賜物と感謝しています。もう一つ、第45回大会を北星学園大学で、大会準備委員長として開催できたことも、学会活動として記憶に残っております。

私自身の研究活動と言えば対人認知の研究から社会心理学の領域に入っていました。同時にパーソナリティにも関心があり、「曖昧さ耐性」についての研究を細々と始めておりました。ただ、研究としてはいずれも十分に満足のような発展をなしとげられなかったと、思い返しています。

学会活動とは別ではありますが、社会心理学の研究者として、同時に心理臨床も実践していたということにも触れたいと思います。臨床心理士の資格を持ち、精神科の病院臨床やスクールカウンセラーなどを経験しながら、他方で社会心理学にも研究者として関わるといふあり方は、次第に増えてきたとはいえ、当初はかなり少なかったのではと思います。公認心理師という形で心理専門職の国家資格が実現した状況を鑑みると、大変感慨深いものがあります。私自身は心理臨床と社会心理学の関わりを「いのちの電話」というボランティア活動の中で実践してきました。電話相談という心理臨床活動ですが、その活動を支える組織の存在は不可欠で、そうした意味では「いのちの電話」は心理臨床活動ではありますが、組織活動でもありました。

こうした経験を踏まえると、社会心理学会のますますの発展を祈ることはもちろんですが、それと同時にいわゆる「臨床社会心理学」の更なる発展を、そして社会心理学者と公認心理師との連携が広がることを期待しつつ筆をおきます。

(いまがわ たみお・北星学園大学)

2018年度日本社会心理学会賞 第20回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われました。慎重に審議した結果、下記の各論文と著作が受賞対象として選出されました。

○優秀論文賞

今瀧夢・相田直樹・村本由紀子

「リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響:失敗した成員に対する評価に着目して」(第33巻3号、原著)

本論文は、リーダーがもつ能力に関する信念、すなわち、暗黙理論によって、ある課題の遂行に失敗した成員の評価のみならず、まだその課題に取り組んでいない成員への評価が影響を受け、集団全体のパフォーマンスや適材適所という観点から増加理論の信念を持つリーダーが不合理な判断をおこなう可能性を指摘するものである。イントロダクションにおいて仮説を導出する論理が整っており、データ分析と仮説の検証との関係も明快である。得られた知見も、増加理論を優勢とみなす従来の考え方に制約を設けるもので、理論的發展への貢献も大きい。以上のことから、本論文は日本社会心理学会・優秀論文賞に値するものと評価する。

○奨励論文賞

岩谷舟真・村本由紀子

「規範遵守行動を導く2つの評判:居住地の流動性と個人の関係構築力に応じた評判の効果」(第33巻1号、原著)

本論文は、社会環境の特性に応じた規範の維持メカニズムを検討するものである。具体的には、社会の特性の一つである関係流動性が評判予測と規範遵守行動の関係に与える影響を検討している。本研究の独創的な点は、1) 関係流動性を従来の主観指標ではなく、居住地の流動性という客観指標により捉えている点、2) 環境変数と個人特性による交互作用効果を扱っている点である。取り上げられている問題自体が独自で社会的にも重要性が高く、理論を精緻化させる試みやデータ収集の方法においても工夫が感じられる。以上を踏まえ、本論文は奨励論文賞にふさわしいものと評価する。

○出版賞

唐沢かおり(著)『なぜ心を読みすぎるのか:みきわめと対人関係の心理学』(東京大学出版会、2017年7月出版)

他者を理解、評価する心理的過程は、社会心理学では「対人認知」として古くから多くの論考がある。そうした中であって本書は、先行諸研究を踏まえた上で「人がなぜ他者をみきわめようとするのか」という点に焦点を当てて新たな角度から考察がなされている。

著者は他者を理解する過程を「心を読む過程」「みきわめる過程」と捉え、性格の評価、行動の原因帰属過程、心の推論の方略といった社会心理学的な問題を概観した上で、「人間としてみる」とはどういうことか、道徳性の根拠としての心とは何かを述べ、最後に、人が互いにみきわめあうことが対人関係上のどんな意味を有するかを論じている。

本書は平易に書かれている。また、社会心理学の初期の研究から最近のものにいたるまで、それも狭義の対人認知に限らない幅広い研究が参照されている。重要な議論や実験はコラムの形で紹介されている。

本書の議論には類書に見られない新鮮さがあり、社会心理学の専門家にとって興味深い内容である。しかも上述のような記述上の配慮がなされているため、本書は心理学の専門家ではない読者でも十分に理解が可能である。人間の心について関心を持つ幅広い分野の研究者や一般の読者にとっても、有意義な視点を提供するものと考えられる。

以上のような観点から、本書を日本社会心理学会出版賞にふさわしい内容であると評価し、推薦するものである。

○出版特別賞

池田謙一編(著)『「日本人」は変化しているのか:価値観・ソーシャルネットワーク・民主主義』(勁草書房、2018年1月出版)

本書は、世界価値観調査(WVS:World Values Survey)、アジアンバロメータ調査(ABS:Asian Barometer Survey)、選挙制度の効果の国際比較調査(CSES:Comparative Study of Electoral Systems)の3つの大規模調査と、ソーシャルネットワークについてのパネル調査を中心に、多様な角度から分析を行った本である。

2016年夏に刊行された『日本人の考え方 世界の人の考え方:世界価値観調査から見えるもの』では、日本人の価値観、意見、行動の世界の人たちとの比較が中心だったが、本書では、国際的比較だけに留まらず、マクロ的、ミクロ的な視点から、時系列的な変化も含めて検証している。

本調査は、選挙人名簿や住民基本台帳から層化二段無作為抽出法により抽出した大規模な標本数に対して、訪問面接法と留置法を併用した調査を実施している。近年、インターネット調査が増加しているが、著者らは、社会調査として信頼性・妥当性が高いやり方で、大規模な調査を継続して実施してきた。さらに、著者らは、日本のデータを世界に公開しており、日本人による日本の理解に留まらず、世界の人々が日本や日本人の価値観や変化を理解する手がかりを提供している。

本書の焦点となったテーマとして、インターネットの普及、ソーシャルネットワーク、東アジア的な価値観、マスメディアの衰退、ナショナリズム、民主主義などがあるが、いずれの分析においても、単純な予想が必ずしも当てはまらないことに気づく。著者らが、これまでの研究を踏まえて、新しい変化もとらえながら、大規模な実証研究を継続してきた点を評価する。

○選考委員会

編集担当常任理事 1名		岡隆(日本大学)
常任理事以外の理事 6名	出版賞	亀田達也(東京大学:受賞者) 渋谷明子(創価大学)
	論文賞	結城雅樹(北海道大学) 中谷内一也(同志社大学:受賞者) 森津太子(放送大学)
		小川一美(愛知淑徳大学)
理事以外の会員 4名	論文賞	福野光輝(東北学院大学:受賞者) 村井潤一郎(文京学院大学)
(編集委員/受賞者)	出版賞	岡本真一郎(愛知学院大学:受賞者) 越智啓太(法政大学)

(文責:岡隆・編集担当常任理事)

受賞者のことば

今瀧 夢



この度は優秀論文賞を頂き、誠にありがとうございます。大変恐縮に、そして光栄で嬉しく思っております。本研究は、私自身が学生時代の部活動において、チームとしての失敗を繰り返す中で、「努力することにこそ意味がある」という日本で強く支持されている通念に疑問を抱くようになった、日常での小さな実体験が元となって始まったものです。執筆を進めながら、日本のさまざまな体制や制度が、この非常にポジティブな努力観に根ざしていることを実感し、本研究が提起できる問題は広く大きなものであるかもしれないと感じていきました。結果として、大変名誉ある形で残せたことを本当に誇りに

思っております。選出していただいたこと、そして共著者のお二方に、改めて心より御礼を申し上げます。

(いまたき ゆめ・株式会社ワタナベエンターテインメント)

岩谷 舟真

この度は奨励論文賞を受賞できたことを大変嬉しく思っております。ここで奨励されたことを胸に今後も研究活動を更に頑張っていこうと改めて思った次第です。

本論文では居住地の流動性と規範遵守行動の関連を検討しました。結果、1)低流動性社会の者ほど(規範逸脱に伴う)評判低下可能性を高く予測し、より高い頻度で規範に従うこと、2)低流動性社会の者に限り、評判低下可能性を過大視していることを明らかにしました。このことから、低流動性社会において規範が多角的無知状態で維持されやすい可能性を考察しました。さらに、高流動性社会の中でも新規知人の多い者と少ない者として行動戦略が異なっており、3)新規知人が多い者は規範遵守に伴う評判上昇を予測するほど規範に従う一方、知人が少ない者にはこうした関連は見られないことを明らかにしました。今後は3)の知見をベースに、流動性などの社会環境に加えて、個人特性(社会階層など)に着目しながら研究を進めていこうと思案しているところです。



このように、本論文は流動性に着目した社会調査を行っていますが、そもそも流動性に着目したきっかけは授業のTAを行ったことにあります。

授業の一環で調査を行うことがまず先に決まっていた、その上で調査だからこそのトピック、なおかつ自分の興味もあるトピックを考えている中で流動性研究と出会うことができました。ある意味で、調査という制約があったからこそ、流動性という視点というアイデアが生まれたのだと思います。今後も制約を楽しんで、研究を進めていければと思います。

また、幸いなことに奨励論文賞を受賞するのは2度目なのですが、本論文の実施・執筆に至るまでは前回と違った難しさがありました。それは、過去の研究の存在です。自分のデビュー作であった以前の論文の執筆時とは異なり、今回は「過去の自分の研究の縮小再生産になっていないか」「考察がワンパターンになっていないか」などと自分に問いかけながら、もがきながらの執筆でした。今後もこうした自問自答や反省、自己批判は継続させつつ、新しい観点を取り入れて研究することで毎度フレッシュな気持ちを持って論文の執筆を行いたいところです。

最後になりましたが、本論文を査読してくださった先生方、選考を行ってくださった選考委員のみなさま、また研究の支援をくださった株式会社ビデオリサーチ様に感謝いたします。有難うございました。

(いわたに しゅうま・東京大学)

村本 由紀子

この度は、私たちのラボの研究論文に対して二つの賞を頂戴するという光栄に浴し、驚きとともに大きな幸せを感じております。いずれの研究も複雑な手順の実験室実験を軸に構築されていますが、それらの実験は各第一著者(今瀧・岩谷)が多大な時間とエネルギーをかけて実施したもので、今回の受賞は彼らの熱意が結実した成果にほかならないと考えています。また、優秀論文賞受賞論文に関しては、2016年3月に今瀧が学部を卒業、第二著者の相田も同年に大学院修士課程を修了して各々社会人となったため、膝を突き合わせたディスカッションが困難となり、データの再分析や文章の推敲に長い時間を要しました。こうした苦労が最良のかたちで報われたことは望外の喜びです。

二つの研究はかなり異なるトピックを扱っているのご指摘をいただくこともありますが、実のところ共通の視点で貫かれている面があります。今瀧論文はリーダーの暗黙理論が成員評価に与える影響を扱い、ここで得られた最も興味深い知見は「増加理論的信念を持つリーダーは、ある成員が課題遂行に失敗すると、まだその課題に取り組んでいない別の成員の将来の遂行に対する期待を低めてしまう」というものでした。このようなリーダーの判断は、いわば根拠に乏しい非合理的なものです。こうした予見に根差したリーダーの言動が成員たちの課題志向性や意欲、共有信念に影響を及ぼし、やがて予言の自己成就的に集団全体のパフォーマンス低下へと結びつく恐れがないとはいえません。その意味で、今瀧論文が扱う事象の先には、他者に関する(誤)推測の連鎖がもたらすある種のマイクロ=マクロ過程を見てとることができます。その視点は、岩谷論文のテーマである多元的無知の生起・維持過程の探究にも通じています。

今回の受賞をラボ全体の励みとして、今後ともみなで切磋琢磨し、魅力ある研究の一つでも生み出す努力を続けてまいりたいと存じます。本当にありがとうございました。

(むらもと ゆきこ・東京大学)

唐沢 かおり



このたびは拙著「なぜ心を読みすぎるのか—みきわめと対人関係の心理学—」(東京大学出版会)に出版賞をいただき、ありがとうございます。

従来、対人認知は「他者を理解する過程」として位置づけられてきましたが、この本では、「他者の心を読み、それに応じて(道徳的な観点から)評価するみきわめの過程」とあるという視座から、近年の様々な領域の知見を統合することを試みました。またその過程が、つながる、助ける、傷つける、貶めるなど、多様な社会的相互作用に展開していく様子にも焦点を当て、社会的認知過程の社会性を描こうともしました。これらの試みがどの程度うまくいったのかは、皆様方の判断にゆだねますが、「私と他者」がおりなす日常の背後にある対人認知の役割について、何らかの洞察を得ていただくことができれば、うれしく思います。

本書はありがたいことに、社会心理学以外の学問を専門とする方々からも、様々なフィードバックをいただいております。社会心理学が考えてきたテーマとの共通性に関するコメントに加え、意図や動機に基づく判断と功利主義の関係、道徳的評価の射程範囲、他者の存在を意識させる環境設計の是非、文学作品における表現との関係など、社会心理学と他の学問との交差から広がる興味深い課題の指摘も多くいただきました。引き続き、皆様方と議論させていただけますと幸いです。改めて、このたびのこと、御礼申し上げます。

(からさわ かおり・東京大学)

『「日本人」は変化しているのか：価値観・ソーシャルネットワーク・民主主義』を受賞して

池田 謙一

ご無沙汰しております。元気しております。当方、今年度は同志社大学社会学部に移籍後6年目にして、はやサバティカルをいただいております。国内研究という限定付きですが、もとより京都の地を目指してきた身からすれば、当地での望外の研究専念の1年間。なにせ「直前」のサバティカルは半年間、20年も前でしたから、心が華やいております。いまは既に半ばが過ぎたにもかかわらず、書きかけの本はまだ幼体。どう書くかの覚悟をするまでにすら3ヶ月もかかった体たらく。もう一度、出版賞を目指せるような本を出したいと力みつつも、道遠ですが、それでもなお心地よいストレスを味わっております。



さて、このたびは日本社会心理学会第20回出版賞をいただき、たいへんに感謝しております。総会にてご挨拶も申し上げず、遅くなってしまい、失礼いたしました。編著には学会賞は出さないという方針だと数年前に聞いたことがあるので、不思議なことになったのですが、協同作業だと候補にすらならないのでは、カミオカンデのノーベル賞もないわけで、ありがたい判断変更だと思いました。世はビッグサイエンスの時代、社会科学も巨大な国際協調の流れの中に確かにあり、一人が突き抜けた仕事をするだけで学界や社会に対する貢献ではなくなりつつあります。本書も、分担した執筆者それぞれ、また国際比較の各国のチームが調査の実施段階から協調・協力した賜物であることを改めて指摘させていただきます。関わった方々に感謝するしだいです。

本著である『「日本人」は変化しているのか：価値観・ソーシャルネットワーク・民主主義』(勁草書房、<http://www.keisoshobo.co.jp/book/b341349.html>)は、学術振興会科学研究費基盤研究(S)の成果に基づいて書かれています。したがって、執筆のメンバーは基本的に同課題のメンバーです。この科研費は2009-2013年度のもので、課題終了後しばらく経ってから書かれています。姉妹編である池田謙一編(2016)『日本人の考え方 世界の人の考え方：世界価値観調査から見えるもの』(勁草書房、<http://www.keisoshobo.co.jp/book/b220027.html>)はその1年ほど前に出ておりますが、それでも遅めの出版ではありました。ここで使っているデータの公開を優先的に行ったとか(東京大学社会科学研究所 SSJDA <https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/Direct/gaiyo.php?eid=0995>)、東日本大震災後の優先的な研究プロジェクトに3年かかった(池田謙一編(2015)『震災から見える情報メディアとネットワーク』(震災に学ぶ社会科学シリーズ8)、東洋経済新報社、<https://store.toyokeizai.net/books/9784492223635/>)などと、言い訳はあるのですが、正直なところ、実際には、著書として熟するにはまさにこの数年間を必要としました。

この本では、科研費で実施可能となった、WVS 世界価値観調査第6波(<http://www.worldvaluessurvey.org/>)、ABS アジアンバロメータ調査第3波(<http://www.asianbarometer.org/>)、CSES 選挙制度の効果の国際比較調査第4波(<http://www.cses.org/>)、という巨大比較調査3本を日本で同一対象者に対するパネル調査の形で実施する、という試みと、そのパネル調査にわれわれ独自のソーシャルネットワーク調査を付加して4年にわたるパネルデータとして取得し、これによって他国では実現していない、これら国際比較調査間の相互連関を吟味するとともに、日本のデータがあつてこそ意義あるいくつかの仮説の検証を可能にしようとしたものでした。内容的には、本の前半は、アジアや世界的な視野の中での現在の日本人の価値観とソーシャルネットワークを巡る解析を中心とし(谷口尚子・栃原修、池田謙一、繁樹江里、竹本圭佑による)、後半は2010年代初頭の日本のメディアや民主主義の変動をとらえようとしたもので、本の題名にあるように、震災や政治状況の激変の中で政党支持や政治参加を含めて、ポピュリズムやナショナリズム、制度への信頼、メディア行動の多面的な変貌に切り込んでいます(稲増一憲、前田幸男、山田真裕、安野智子、小林哲郎による)。章によってパネルデータの利点を生かした分析、国際比較データを生かした分析を含んでいます。

実際にどこまでインパクトのある研究となったかは、本書を読んでいただくしかありません。大震災を挟んでパネル調査のサンプル落ちが激しい時点があるなど、本来のパネル・デザインの特長が十全に発揮できず、調査間の関連性の分析をがつつり行いえたかと言えば忸怩たる部分もあります。改めてリベンジを果たしたいものですが、それでもこのデータが取得でき、共同研究者の協力の成果として本書が成ったことには大きな達成感があります。今後ともこうした地味なプロジェクトに光が当たるようにと祈っております。

上記3つを含め、他にもいくつか国際比較調査研究に20年ほど関わり続けた視点から、何点か強調して申し上げたいことがあります。

国際比較調査の底力：ビッグサイエンスの時代と申し上げましたが、本書で対象とした世界価値観調査はデータ取得・公開した国だけで60ヶ国、アジアンバロメータ調査は14ヶ国(現在実施準備中の第5波は16ヶ国)、CSES調査は40ヶ国・45国政選挙の規模のもので、いずれも国際比較調査のコミットを結成し、そこでの議論の中で、何が比較され、検討されるべきかを長時間かけて討議した上で共通の調査票を作成し、それをランダムサンプリングに基づいた全国面接調査として各国が実施し、実施後も長時間にわたるデータ整備と国ごとのマクロデータの作成を行った上で、世界に向けて発信しているものです。こうした試みの底深い地道さとインパクト、そして盛大に公開されていることにもっと気がついていただければ幸いです。

日本発、日本が親玉、という発想にとらわれずに、日本データの魅力を伝えること：科研費の審査は長い間、大規模な国際調査でも、日本が言い出しっぺで中心でないと重要な研究だと認めがたらない傾向がありました。そうした覇権主義的な発想は間違いです。基軸通貨としての円とい

うアイデアがどれだけ成功したかに思いをいたせば、当該分野での基軸研究を世界を統べて先頭で実施する、というのがいかに困難か、おわかりになると思います。ナンバーワンでないにだめなんですか、という問いもまたおかしい。オンリーワンもいただけない。ガラパゴス化しないこと、どこが言い出しっぺであれ、広い範囲の国際比較研究を可能にするプロジェクト自体に日本の研究者、日本のデータが貢献するというところこそ、肝要です。新しいボーイングの機体の数十%が日本由来のものであるということが、日本が新機種協同作業完遂において不可欠のメンバーになっている証であると同様、ビッグサイエンス的な国際比較調査に日本も加わり、そこで貢献することがどの程度の意義があるかをお考えいただければと存じます。

そうした中で、日本のデータ、日本人、日本という国はとてもファンタスティックな立ち位置にあります。非西欧圏で最長の民主主義国家であり、非西欧でアジアの文化の入り口、西欧との文化のハイブリッド化が最も多く進んだ国の1つとして、またいわゆる「課題先進国」として多々の解くべき社会的問題を抱える国として、日本を分析の対象に含めることが他国にとっても比較の対象として大いにプラスになる構造があります。この意味で、日本が国際比較調査から抜け落ちることはあってはならず、他国からも歓迎される日本のデータにもっと光を、と思わざるを得ません。この点は、友人で研究仲間としてこの領域に引っ張り出してくれたガイア・ヘルゲゼン(コペンハーゲン大)、朱雲漢(台湾中央研究院)、ラス・ダルトン(UCLAアーバイン)からも、大いに啓発された点でした。

データの共有と公開:オープンサイエンスの時代に、私の素データとあなたの素データを互いに見せ合わず隠し持ちながら、こちらの方が成果がよく出ている、と主張するのは、意味がありません。トランプ(大統領ではない)の勝ち負けではないのです。政治学のトップの専門誌では論文で扱ったデータが公開データでなければ論文の全てのデータを雑誌に寄託しなければ出版できない、というところさえあります。この意味で、データの寄託と公開の重要性をもっとお考えいただきたいものです。折しも、学術振興会肝いりのプロジェクトとして、日本のデータの国際的共有を明確にプッシュし、現状を大きく改善する「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築プログラム」が走り出していることもお見逃しなく https://www.jsps.go.jp/data_infrastructure/index.html。「情けは人の為ならず」になぞって言えば、「データ公開の貢献は人の為ならず」、自らのためでもあります。

科研費審査:当学会会員の中には、かなりの数の科研費の審査員経験者の先生方がいるかと思えます。基盤研究(A)をはじめとする科研費のかかなりの費目において、しばしば申請をパスしても一律三割カット(場合によっては四割カット)などの査定をしていることはよくご存じでしょう。これはより多くの研究者が科研費を取得できる配慮であることは一方の真実ですが、他方、「盛る」申請を横行させることにつながります。申請額をカットされたら「工夫して研究せよ」という要請もありますが、安易にカットができないような申請もあります。例として、日本人の代表性あるサンプルを各国比較の必要上1,000がミニマムであるような場合、3割カットされては研究自体が難しくなることがあります。つぶさに申請書を精査していただきたいとお願いいたします。また、申請において「独自性」「新規性」「創造性」を強調する仕掛けになっているのも、疑問に思うことがあります。何回も同じデータを取る継続性があるからこそ、歴史的な分析や国際比較が可能となる課題はいくらでも存在します。継続し持続することこそが新しい分野と視野を開拓しうるものにさえなりえます。研究の価値は1回の課題の独自性や創造性では決まってしまう。こうした点についても、目配りをさせていただきたいところです。

研究の世代:今回、受賞の対象となった研究はその後にも継続してデータを取る必要があります。とともに、当方の世代から言って、徐々に日本代表者を交代して次世代に役割を交替すべきところまで来ています。CSESの選挙調査は既に関学大の山田真裕教授に第5波の研究遂行を2014年にバトンタッチいたしました。アジアンバロメータ調査第5波の準備は、次世代をお願いしたい方々と現在基盤研究(A)にて来年度、全国調査をタブレット端末による調査・実験という形で実現します。ですが、世界価値観調査第7波は既に開始時期に来ているにもかかわらず、いまだ資金調達に至っておりません。なかなか難しい事態であり、ヘルプ・アス、次の世代の奮起を乞う、という状況です。

というように、舞台裏まで多少なりとも言及させていただきましたが、ビッグサイエンス系のデータ量の豊富な比較調査研究、時系列データは、まだまだこれからです。その発展とともに、今までは十分に計量的・統計的な厳密さの点でこだわり可能ではなかった研究領域が新たな視点から拓かれ、きりと分析され、広く繁栄していくことを期待し、できれば自分でも貢献していきたいと励まずにはられません。

なお、5年半前の移籍にあたっては、50代後半のことで首をかしげられた方もいらしたようですが、移籍後にひとまとまりの仕事を可能にするにはとても良いタイミングでした。同じ仕事場で、できれば10年以上のタイムスパンで腰を据えて働きたいと念じたのが正解だったと、本人の心の内側からのみならず、外のピアという立場からも賞によって励ましていただき、重ねて感謝申し上げます。

(いけだ けんいち・同志社大学)

第6回「春の方法論セミナー」のお知らせ

2019年3月21日(木)春分の日に、前回同様、明治学院大学を会場として、第6回春の方法論セミナーを開催いたします。今回も2つのセミナーを準備していますが、詳しいお知らせについては、近々メーリングリスト等でお知らせする予定です。もう少々お待ち下さい。また、前回は2つの

セミナーを同時中継し、録画の公開もしていますが、今回については、諸事情により、片方のセミナーのみの中継となる予定です。ご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

第5回のセミナーの録画は以下の URL でご覧いただくことができますので、どうぞご利用下さい。

- ・経験サンプリング A to Z https://www.youtube.com/playlist?list=PL7OS4lcGSZ3BeAjZIZQzHSdGFM_AgD0aA
- ・R/RStudio 入門 <https://www.youtube.com/playlist?list=PL7OS4lcGSZ3B1R3kbwu57jPNEpacCCAwP>

工藤恵理子 学会活動担当常任理事

訃報

小川一夫先生(広島大学教育学部名誉教授)(名誉会員) 平成30年7月26日 ご逝去

本学会名誉会員の小川一夫先生が、平成30年7月26日にご逝去されました。地域社会や教育場面における諸問題について、社会心理学的視点から数多の重要な示唆を得ることのできる研究をされました。また、『学校教育の社会心理学』『くらしの社会心理学』『新・くらしの社会心理学』といった名著を多数出版されました。ご冥福をお祈りいたします。

野村昭先生(関西大学名誉教授)(名誉会員) 平成30年7月27日に事務局訃報受領

本学会名誉会員の野村昭先生(関西大学名誉教授)が、平成29年3月7日にご逝去されました。享年89歳。野村先生は、社会と文化、俗信といった要素に注目し、文化人類学的視点と社会心理学的視点の両方を持ち合わせた独創的な研究をされました。また、名著を多数出版されています。ご冥福をお祈りいたします。

山岸俊男先生を偲んで

高橋 伸幸

山岸俊男先生は複数の研究領域において顕著な業績を挙げた。先生のキャリア上、最初に国際的な貢献をなしたのは、社会的交換理論の第一人者としてである。先生は70年代までは主に理論研究のみが行われていた社会的交換ネットワーク研究を、初めて実験室実験による検証が可能なたちに拡張し、その後の発展の基礎を築いた。特に、人々が埋め込まれているネットワーク構造によって権力関係が規定されることについては、80年代終わりから様々な研究者グループが相互批判しつつ理論的・実証的研究を進展させてきたが、先生は其中で中心的な役割を果たしたのである。

山岸先生はほぼ同時期に、社会的ジレンマの研究者としても頭角を現しはじめた。先生の特筆すべき貢献には、社会的ジレンマ状況での人々の意思決定には「他者は集団に対して協力するだろう」という期待が大きく影響していることを明らかにしたこと、またジレンマの解決法として従来考えられていたサンクション(非協力者に罰を与えること)の使用には様々な問題があることを指摘したこと、等が挙げられる。また、二者間の囚人のジレンマに関する研究においても、従来は特定の二者間に永続的な相互作用があることが暗黙の裡に想定されていた限界を乗り越え、各行為者が相互作用相手を選択するという選択的プレイパラダイムを提唱したことにより、世界的に注目を集めた。

以上の二つの研究テーマにおける成果の蓄積に基づいて90年代に山岸先生が精力的に研究を進めたのは、信頼に関する研究である。従来は、経済学における信頼研究は「信頼に値する行動」についての研究、即ち信頼される側の研究であり、心理学における信頼研究は「相手が信頼できるかどうか分からないときに信頼すること」についての研究、即ち信頼する側の研究であった。先生は、このような信頼研究の二つの流れを初めて統合し、「人はなぜ他者一般を信頼するのか」という問いに対する解答を与えた。先生の提唱した「信頼の解放理論」は学際的研究の一つの道標であり、社会心理学の枠を大きく越えて、社会学、経済学、政治学、人類学等、多くの他領域において大きな影響を与えた。

その後、21世紀になると、山岸先生の研究はいよいよ社会科学諸分野を大きく超えて、生物学、及び神経科学などの複数の領域にまたがるようになり、統一人間社会科学誕生へ向けた助走段階に入る。この段階での先生の研究は多岐にわたるため、ここでは主に二つの研究群(ただし、相互に独立しているのではなく、関連し合っている)について紹介する。まず、先生はジレンマ研究に進化心理学的視点を取り入れ、人間は心理メカニズムとして社会的交換ヒューリスティックを備えており、それにより協力するのだということを明らかにする一連の研究を行った。このヒューリスティックは、活性化されると人を協力的・互恵的に振る舞うように導く。人間の協利行動がヒューリスティック的に決定されているのか熟慮の結果なのかは、近年様々な分野の研究者を巻き込んで Nature、Science、PNAS などの一般科学誌において活発に議論されているが、その嚆矢となったのは先生の一連の研究である。先生はまた、脳構造と協利行動との関連についても検討し、脳形態の個人差が、その人が協力するのはヒューリスティック的意思決定の結果なのか熟慮的意思決定の結果なのかという点と関連していることを明らかにした。これらの一連の研究は、従来の「文理融合」研究の多くが文系研究者が一種のトークンとして加わるかたちで進められてきたのとは異なり、人間科学・社会科学の根本問題を追求するための道具として脳科学や神経科学の手法を用いている。これは、まさに新時代の「文理融合」の方向性を示したという点で、極めて重要な意義を持つ。

もう一つの研究群は、人間を社会的ニッチ構築者と見なす観点からの研究である。なぜ世界には様々な社会が存在しているのか、それらは今後どのように変化していくのか、という人間科学・社会科学の根本問題に対して、人間の心の働きは社会のあり方と不可分であること、即ち、人間の心を社会生活を送るための適応の道具として捉え、また社会もそのような適応的な心を持つ人間の相互作用により構築されているというパラダイムを提唱した。これにより、例えば日米間の社会レベルでの差異と心理レベルでの差異の両方が原理的に説明可能になる。このパラダイムは、従来の比較文化心理学や文化心理学が、心の文化差はその社会で暮らす中で身につけてしまった選好の問題であると考えるのに対し、異なるのは当該社会で賢く生活していくためのデフォルトの状況認識と行動パターンであるとみなす点に大きな特徴がある。この観点に基づく一連の研究成果も、国際的に大きなインパクトを与えた。

このように、先生は社会心理学者として出発しながら、その分野に留まることなく、様々な学問領域の知見を取り入れ、またそれらの領域に向けて自ら研究を発信することにより、真に学際的な活動を行ってきた。このような貢献は高く評価され、先生は様々な賞を授与されてきた。主なものに、日経・経済図書文化賞(平成10年)、日本心理学会国際賞特別賞(平成25年)、アジア社会心理学会三隅賞(平成25・27年)がある。また、平成16年には紫綬褒章、25年には文化功労者に顕彰されている。

このような傑出した業績を挙げることができたことの背後には、山岸先生の超人的な努力があったことを忘れてはならない。7時半～22時半の15時間が先生にとって大学で研究を行う時間であったことを知らない関係者はいない。新技術を取り入れることにも貪欲であり、社会科学において最初にコンピュータを用いた集団実験を行ったパイオニアであり、近年はMRI研究まで行ったのは、驚嘆すべきことである。特に、普通であれば晩年、あるいは円熟期と呼ばれるはずの還暦を迎えて以降、むしろ研究のペースを上げつつ神経科学という新しい分野に進出していったこと、亡くなる直前まで進行中の実験について議論していたこと、執筆予定の本もあったことなどは、先生が全ての面において最後まで挑戦者であったことを如実に物語っている。

ただし、1人でどんなに努力しても、それだけで達成できることには限界があることを、山岸先生は最初から認識していた。そのため、学生や共同研究者と研究チームを作ることを積極的に行い、研究効率を単独で研究を行う場合の数倍にしていた。その最大の成果が、先生が生涯の中で最も長期間を過ごした北大行動システム科学講座である。先生は2002年以降、21世紀COE及びグローバルCOEリーダーとして、北大行動システム科学講座及び社会科学実験研究センターを世界的な研究教育拠点として確立すべく、超人的な働きをしてきた。これだけの実験施設を備えた拠点は世界でも稀であり、それを運営する人材との相乗効果があったからこそ、21世紀以降の研究ペースの急速な上昇があったと言える。ただし、もちろん研究施設としての社会科学実験研究センターは先生の独占物ではなく、広く他のメンバーに開放されていた。先生の研究第一という方針の下、全メンバーが研究しやすい環境を整えたことは、近年の日本の大学教育を取り巻く環境を考えると、驚嘆を禁じ得ない。

以上、山岸俊男先生の研究者としての人生を概観してきた。上述のとおり、先生の研究活動は日本人の人文・社会科学分野の研究者としては群を抜いて国際的に極めて高く評価されている。研究の被引用数が8000件以上というのは、他では類を見ない突出した数値である。真の社会科学の揺籃の時期にあたる現在、先生のこれまでの研究の持つインパクトと先生の影響を受けた研究者の活躍は、今後ますます重みを増していくであろう。

(たかはし のぶゆき・北海道大学)

会員異動(2018年6月1日～2018年10月30日)

入会

《正会員》

・一般

古賀 弥生(九州産業大学地域共創学部地域づくり学科)、清水 由紀(埼玉大学教育学部准教授)、厨子 直之(和歌山大学経済学部准教授)、外川 拓(千葉商科大学商経学部商学科准教授)、浜村 武(Curtin University School of Psychology)

・大学院生

小川 七星(上智大学大学院総合人間科学研究科心理学専攻)、酒井 拓人(愛知学院大学大学院心身科学研究科)、佐野 有利(法政大学大学院政策創造研究科政策創造専攻)、千賀 智穂子(三重大学教育学研究科)、竹内 晴佳(大阪市立大学文学部研究科)、渡辺 藍丸(早稲田大学大学院文学研究科)、王 麗娜(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

退会(2018年5月31日～2018年11月1日)

小川 一夫(物故)、杉田 千鶴子(物故)、田坂 英恵、野村 昭(物故)、森 真邑

自動退会

相田 めぐみ、ALMEIDA Igor、赤川 紗弥華、東 ももこ、池田 功毅、磯崎 三喜年、井上 佳朗、入江 智也、岩林 明美、上田 あすみ、内山

博之、宇和川 美保、大家 慧、越智 美早、小俣 克之、角野 充奈、上則 直子、川口 司寛、川嶋 健太郎、木谷 直之、久禮 まゆ、KOSTYUK Evgeniya、コプラダ マテイ、佐藤 亜美、佐藤 雄一、式部 真奈、篠原 亜佐美、渋谷 恵、SCHUG Joanna、ゼール ミリアム、関向 諒太、宋 佳、高野 裕介、武上 雅紗世、竹下 里穂、田代 実希、館野 洋輔、館松 詩織、田中 千絵、田中 康夫、棚橋 菊夫、谷本 奈穂、丹波 秀夫、中井 周作、中島 英里香、永富 まどか、中西 裕希未、奈田 哲也、根田 貴弘、野村 智之、哈布日、濱野 裕貴子、林 幸範、平野 英一、平山 いずみ、黄 麗華、藤田 正、二木 望、堀本 美都子、正高 杜夫、松ヶ崎 溪介、松木 敦志、馬 偉軍、松本 敦、丸本 奈央、三浦 由美子、村田 遊哉、森山 加菜、八野井 彰、薮ノ 弘美、吉田 寿子、吉野 太基、戎 夢婷、渡辺 光咲、渡辺 良智、渡部 幹、徐 文臻

所属変更

西道 実(武庫川女子大学社会科学系学部設置準備室)、豊島 昇(共立女子短期大学生活科学科)、内藤 哲雄(明治学院大学国際平和研究所)、結城 裕也(仙台白百合女子大学人間学部心理福祉学科)、小野 弘(常葉大学保健医療学部作業療法学科)、篠田 潤子(東京通信大学人間福祉学部)、尾関 美喜(岡山大学大学院社会文化科学研究科)、萩原 剛(一般財団法人計量計画研究所研究本部 交通・社会経済部門)、風間 みどり(小田原短期大学)、佐藤 剛介(高知大学学生総合支援センター)、伊藤 崇達(九州大学大学院人間環境学研究院)、中原 純(中京大学現代社会学部)、菊地 学(目白大学人間学部心理カウンセリング学科)、宮本 匠(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科)、滑田 明暢(静岡大学大学教育センター)、郡司 郁子(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構東京事務所計画調整 Gr)、森下 雄輔(神戸学院大学人文学部人間心理学科)、小林 智之(日本学術振興会(福島県立医科大学))、井上 裕香子(東京大学大学院総合文化研究科進化認知科学研究センター)、トムソン ロバート ジョン(北星学園大学文学部英文学科)、小西 信義((一社)北海道開発技術センター)、長谷 和久(神戸学院大学心理学部)、宮武 沙苗(在サウジアラビア日本国大使館(外務省))、田崎 優里(追手門学院大学心理学部)、大森 翔子(東京大学大学院法学政治学研究科)、伊崎 翼(産業技術総合研究所自動車ヒューマンファクター研究センター生理機能研究チーム)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

第34巻第2号(2018年11月刊行予定)

秋保 亮太・縄田 健悟・池田 浩・山口 裕幸 チームの振り返りで促進される暗黙の協調:協調課題による実験的検討

豊沢 純子・竹橋 洋毅 割引食品に対する衝動性と生活史の関係

堀川 佑惟・岡 隆 Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版(ATLG-J20)の作成と妥当性の検討

三船 恒裕・横田 晋大 社会的支配志向性と外国人に対する政治的・差別的態度:日本人サンプルを用いた相関研究

編集後記

会報がデジタル化されたこともあり、分量等をあまり気にせず編集をしています。会員の皆様方から原稿をお預かりする際、できることなら写真もと思い、直接皆様からお預かりしたもの、学会会期中に撮りためたものなどを積極的に活用しています。写真が増えたことで、会報に色がつき、多少賑やかな雰囲気になっているのではないかと思います。ただ、そのぶんファイルサイズが大きくなり、学会サイトから会報をダウンロードする際にご不便をおかけしているかもしれません。ファイルサイズを節約しながらコンテンツを充実させる必要があることを痛切に感じています。役員選挙の結果は、1月上旬に速報をお伝えする予定です。

(宮本聡介・広報担当常任理事)